

● 中期経営計画を読む

シルバーライフ [9262・東1]

高齢者向け配食サービスのフランチャイズチェーンを展開しているシルバーライフ(9262・東1)では、2025年を最終年度とする中期経営計画を策定した。「これからの5年間で今後30年の成長を左右する一番重要な時期」と位置づけ、売上高140億円を目指していく。

2025年までに売上高140億円 工場新設で生産能力4倍に

清水貴久社長



プロフィール●しみず・たかひさ
1974年7月31日生まれ。1998年警視庁に入庁、99年ベンチャーリンク入社。2002年2月マーケティング・イン設立。FC開発部長。12年9月シルバーライフ代表取締役社長に就任。

物流網を整備し作業効率化

同社の2020年7月期の売上高は88億3200万円と前年比13・2%増。主力の「まごころ弁当」「配食のふれ愛」の2ブランドで展開しているFC事業は、前年比13・2%増の63億5000万円となった。

同社を取り巻く事業環境は今後も明るい。同社がメインターゲットとする75歳以上の後期高齢者人口は、2020年1872万人で、2025年には団塊の世代が後期高齢者となり、218

0万人にまで拡大すると予想されている。「以降も増加が見込まれ市場も拡大の一途を辿る」(清水貴久社長)ことから、中期経営計画によって同社は新たな成長戦略を描く。

外部環境を背景にした売り上げ増施策では、FC加盟店のさらなる増加ほか、既存ブランドに加え、新たなブランドを立ち上げる計画だ。高齢者施設向けは主力の冷蔵食材から冷凍食材へとシフトし拡販を図る。また新規OEM先の獲得や冷凍弁当の直販などに強化する。

鍵となるのは自社工場の生産能力の拡大だ。同社は日替わりの総菜を低価格で提供するため、通常の食品工場ではなかなか対応できない。このため自社工場を構えているのだが、現在、群馬県邑楽郡にある自社工場は「冷凍弁当の製造量は1年半でほぼ2倍に増加した」(同氏)ため、2021年初旬に栃木県足利市に第2工場を新設す

る。同工場では1日15万食の冷蔵食材の生産が可能になる。「自社工場の生産能力は現在の4倍になる」(同氏)

同時に保管体制の確立も進める。2017年、同社は10万食保管可能な物流センターを建設。しかし、冷凍弁当の製造量が1・9倍に伸びたことで、保管場所が足りなくなってしまうという。

「近隣の借りていた倉庫も満杯に近づきつつあることから、新たな専用倉庫を新設することとなった」(同氏)。

群馬県館林市に建設する新設倉庫は135万食の保管が可能だ。

「自社工場と保管倉庫の新設により、1日20万食の製造と保管が可能になる」(同氏)。

実は同社の売り上げ拡大のボトルネックとなっているのは、倉庫不足だった。現状は工場からいったん外部倉庫を通して自社倉庫に移す工程を経て配送している。これでは積み下ろしコストが2倍かかるうえ、その時にトラックがなければ荷物を必要な時に運べない。新倉庫が完成すれば、工場から直接移すことができるため、「作

株式データMEMO

直近株価	1,985円 (20.11/27終値)
年初来高値	2,980円 (20.1/21)
年初来安値	1,324円 (20.3/19)
時価総額	212億円
PER	46.2倍 配当利回り —
PBR	4.87倍 決算期 7月

2020年7月期 業績	前期比
売上高	88億3200万円 13.2%増
営業利益	9億3400万円 5.6%増
経常利益	10億8600万円 8.4%増
当期純利益	6億7800万円 6.8%増
2021年7月期 業績予想	前期比
売上高	95億3000万円 7.9%増
営業利益	6億5000万円 30.4%減
経常利益	7億7000万円 29.1%減
当期純利益	4億6000万円 32.2%減

業効率も上がり、輸送、積み込み、荷下ろしのコストを削減することができると(同氏)。新倉庫は、ピッキング等の作業を機械化するなど最新システム導入で、人手不足の補完と省力化を図る。

同社はこれらの施設の新設と、生産管理システムにより、今後、約50億円を投資する。

